

## ◇ 近況・随筆 ◇

# 火口底を歩く

式 正 英

あの高村光太郎の「智恵子抄」にも出てくる安達太良山の山頂の西側で、昨年（1979年）の夏、異様な風景に出会わした。「沼の平」という所である。その前日も好く晴れていて裏磐梯を遊んだ。るり沼、青沼、みどろ沼、赤沼など夫々の色合いに応じて印象深く、光と影と色彩の織りなす変化は、酔うほどの美しさであった。桧原湖も秋元湖も小野川湖も濃い青い水をまぶしい程に湛え、これらをとりに囲む吾妻や磐梯のゆるやかな山腹には、雪国特有の青黒い緑の森林の鮮やかな色彩があった。それが沼の平の一郭だけは全く異っていた。白い粗い砂やレキに敷きつめられた径300mほどの平坦な底をもつ円形の凹地だったのである。

冬のスキー場で著名な沼尻高原の温泉に宿をとり、ごく軽い気分で滝を見にでかけた。沼の平から流れ出ている硫黄川（沼尻川）の中流の白糸の滝を見に、である。溶岩層に懸かる滝は高さ50mもあり、水量も豊富で、その名前よりはずっと雄大なものであった。滝を眼下にみる高捲道から、上流側の谷に降りた所に湯本、つまり沼尻温泉の泉源があり、ここで豊富に湧出する温泉を木樋で4kmもひいている。もともと茅葺きの湯小屋は湯の華を採掘する人夫の休憩所となっていた。谷の南側の溶岩の壁は障子ヶ岩、北側の壁は胎内岩、これらに挟まれた青い空間に吸いつけられるような気分で更に谷沿いにつめてみることにした。いつしか川水はなく、岩塊だけが乱雑に積み重なる谷底を登りつめた所に沼の平があった。

そう言えば沼尻という呼び名に大した注意も払わず、沼の平に蜻蛉の飛びかう湿地を想像していたのだが、これはどうしたことであろうか。沼の平は植生も水も皆無の全くの死の世界だったのである。沼の痕跡は、周縁をかこむ形で残っている高さ20m程の湖岸段丘様の地形と、石英安山岩質の白い火山礫にまじって、腐植層の黒い薄い帯が挟まれている位なのである。平が河谷へ臨む西の端の段丘上に柱や棟木だけの廃屋が二軒荒涼と佇んでいる。小屋の基礎の付近には、硫黄臭がただよい噴気活動のあることが判った。それでも登山路は、標識だけだが、平の中央を横切り、主稜線の鞍部である馬の背に至る斜面の麓へと通じている。

夏の陽ざしにこの裸地の照り返しは目もくらむ程強烈だったし、折りからの雷鳴も加わって、不気味さはいや増し、思わず浮足だつてこの平を駆けぬけるような有様であった。この光景はどこかで見たことがあると思ひおこすうちに、ふと沙漠の盆地床がそれだと想いついた。カリフォルニア州西部のアマゴースの谷やトロナの谷に酷似している。極乾燥地の植生を許さない、鉱物だけの無機質の世界である。あの場合も湖岸段丘の黄白色の壁が干からびて目立って見えていた。「自動車道路だけが安全であとは生命の保障はしない」という看板を見ながらも、赤錆びおき去りにされた車の残骸にやる瀬ない思いをしたものである。

沼の平にはもともと火口湖があったのだが、明治33年（1900年）7月に大爆発し、当時ここに操

業されていた硫黄鉱山が被災し、70名以上の従業者が死に生存者は3名に過ぎなかったという。大変な災害だが、明治21年の磐梯山の爆発とその災害の規模にかくれて余り語る人がいないのかも知れない。箱根の早川が芦の湖の湖尻から発するのと同じに、「沼の平」火口湖の沼尻から発していた火口瀬の沼尻川から、沼尻高原の名前が由来したのであろう。上記の廃屋は当時の鉱山小屋の筈なのだが、この火山爆発を説明する立札も何もない。その上、硫黄臭のする火口底を、何の注意を受けることもなく歩けるのには、未だに不思議な思いが残っている。

(1980年1月15日)

## 浅井先生のこと

井内 昇

浅井先生が定年退官される。日頃、若々しい、元気なお姿に接していると実感が湧かないが、その日は間違いなくやって来る。先生が去られた教室を思うと寂しい。

先生の学問的な業績については他に語るべき適任者が多いから、この欄を借りて先生の身近な印象を幾つか綴ってみたい。

先生におつき合い頂いた期間は5年に満たないが、先生のお名前を認識したのも確か今から7～8年前のことであった。当時、勤め先の雑誌書庫の中で調べものをしていた時、ふと手にとった雑誌の中に、先生の「実験地理学(?)の提唱」の記事が載っていた。その頃、役人生活を続けるか、或いは将来大学に転ずるかを考え始めていたこともあって読んでみたのだが、「地理学研究とは、地味で根気の要る仕事だ」ということを教える、怠け者にとってはいささか士気沮丧させられる厳しい内容だったことを覚えている。先生のこの実験、実証を重んずる研究態度には、その後ゼミや論文発表会などでしばしば接することができたが、このことが私にとって研究上の大きな戒めとなっていることを今あらためて感じている。その頃から私も春、秋の大会などに顔を出すようになり、知らないうちに先生の容姿に接していたらしく、50年夏に初めて教室で先生に紹介された時、「あゝこの方が浅井先生だったのか」と、名前とお顔が初めて一致した次第である。

それから4年余、偶然先生の隣の研究室に住み着いたこともあって、先生との接触の機会もふえたように思う。学問以外の部分での先生の印象といえば(誰でも同じと思うのだが)、その心身の若さ、特に旺盛な好奇心であり、その具体的な現れの一つが機械好き、工作好きの面であろう。先生の研究室を中心に、観測設備から居住環境施設に至るまで、先生手づくりの作品は数知れず、しかもそのどれもが素人とは思えぬ見事な出来ばえを示している。時々、先生の研究室から電気鋸の音が聞えてくると、「次の作品は一体何であるか?」と興味深々その完成を待ったものだった。機械好きの面が最も発揮されたのは写真に関してであろう。教室の大型写真複写機を動かせるのは先生だけであつたし、日常的なカメラ操作でも玄人の域に達しておられた。特にサウンド付8mmと立体写真にご熱心で、立体写真は市販の部品では飽き足らず、工作知識を駆使して業者に特注する、という癡り様であつた。一般に機械好き、といわれる人達は、写真、ステレオ、自動車の3つをこなす様だが、この点、不思議